

平成30年度 管理職「人権教育」研修講座

「人権教育の推進についての基本方針」に則り、「人権教育推進プラン」及び「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕（文部科学省）」を踏まえた人権尊重の精神に立つ学校づくりの推進に向け、具体的な取組等に学ぶ研修を実施しました。

- 1 日時及び会場 平成30年6月19日（火） 13:30～16:00 県立教育研究所
- 2 参加者 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の管理職《235名》
※各校1名参加、奈良市立の学校からの参加を除く。
- 3 日程及び内容
13:30 開会行事
13:40 講演「子どもたちの可能性は無限大」
15:10 説明「人権教育の推進に向けて」
15:15 講義「人権尊重の視点に立った学校づくりの具体化に向けて」

《研修講座の概要》

【講演】

「子どもたちの可能性は無限大」

川島 三由紀（三重県人権教育研究協議会会長・元松阪市立西中学校長）

- ・ ぐらに課題を抱えた子、低学力の子、高校に行けずにあえいでいる子を目の当たりにして、どうにかして子どもたちの学力格差を縮めたいと「子どもたちが学び合い、聴き合い、安心して発表できる」授業への改革、小中学校の連携等を進めてきた。
- ・ 人権教育はすべての教育の基盤であり、学力をきちんと高めていくためには、教職員の人権意識・人権感覚が確かなものでないといけない。授業の中で支え合う関係が構築できた時に、生徒は本当の意味でがんばれることを私たちは忘れてはならない。
- ・ 「生徒の本音に耳を傾けよう」としない「授業改革をどう進めていいかわからない」など、若い教職員の実態や困り事に目を向け、校長をはじめ、ベテランが一丸となって、家庭訪問や三者懇談のロールプレイを用いた研修を行ったり、若い教職員の授業を見て回ったりした。子どもたちの登下校のことで地域からお叱りを受けるようなことがあれば、校長自ら地域に立って交通安全指導を行うことで、地域の理解も得られるようになった。
- ・ 学校として、どんな教職員を育てたいか、人権教育を中心に据えた組織マネジメントをどう進めるのかという展望をもち、管理職のリーダーシップを発揮し、本気になって取り組むことで、ことは進んでいく。



【講義】

〔小・中学校分散会〕

講義 「人権尊重の視点に立った学校づくりの具体化に向けて」

梅木 誠（奈良県人権教育研究会事務局）

- ・ 子どもたちに「先生は自分のことを分かってくれている」と実感させることが大切。ややもすると教師目線で勝手に「自分はできている」と思っていないか、常にアンテナを張り検証する必要がある。また、そのことを互いに指摘し合える教職員集団をつくる必要がある。
- ・ 学校という組織づくり、体制づくりをしていく中では「会話」でなく「対話」が必要となる。それぞれの意見を単に主張し合い、聞き合うだけでなく、管理職自らがそれぞれの意見から新たな結論を積極的に導き出そうとする「対話」を行うことが求められている。



〔高等学校・特別支援学校分散会〕

講義 「人権尊重の視点に立った学校づくりの具体化に向けて」

河合 隆次（奈良県高等学校人権教育研究会事務局）

- ・ 人権尊重の学校づくりを「多様性」「関係性」「参加性」を基軸に考える。学校は、多種多様な思いを抱えた子どもたちが集まってくる場所であることを理解し、管理職として、そのような子どもたちを支える、保護者・地域住民・教職員のネットワークを構築することが求められている。
- ・ 教職員も多様な個性・特性をもつ存在として、管理職をはじめ、様々な立場の教職員が子どもたちとの多様な関わりの中で日常的に人権教育に取り組む必要がある。そのような中で、子どもたちが「響きあい、動き出す」ような「居場所」づくりを進めていく工夫が必要である。



＜参加者の声より＞

- ◇ 「良い授業が集団を高める」という理念のもと、教職員を鼓舞して学校改革に取り組まれた内容を伺い、自校でも大切にしていることなので、改めて自らの実践をさらに推進していきたいと感じた。
- ◇ 管理職をはじめ、教職員が本気になったときにこそ、子どもが本音を出し、授業が活性化し、集団としての高まりを見せ、地域との協働も生まれるということが改めてわかった。
- ◇ 学習や家庭生活、人間関係等に「困り感」をもっている子を中心に、互いを認め合いつながりのある集団をつくるためには、教職員を一つにまとめた学校づくりをしていくことが大切であるとわかった。